

小泉璃夜こいずみりやが生まれたときから暮らす家は、A町の高級住宅街にある。

愛らしく若々しい母親は、璃夜が生まれたときからお嬢さまと呼ばれていた。ハンサムで頼り甲斐のある父親は、璃夜にはどんな職種かわからないまでも、とりあえず立派な会社に勤めていた。どちら方の祖母も現役で企業の役員を務めており、小遣いが不足したり環境が悪化したりしたことは一度もない。

中学一年生、十三歳になったばかりの璃夜は、人生や家族に関して深刻な不満を感じたことはなかった。これまでそうだったように、これからもないだろうと漠然と考えていた。

昨日と同じ今日が来て、明日も平安で過ごせる。

それが当たり前のことだと思っていたのである。

腺病質な璃夜は、年齢よりずっと小柄だったおかげで、小学生のころはよくいじめられた。

同年の男子から相手にされず、女子のグループにいじめられた。

おどおどして頼りなく、女の子よりも小さくて口の足らない璃夜は、女子にとっては鬱陶うつとらしく、無視するのさえ億劫な相手だったのだ。

男子からすると、女子にいじめられただけですぐに泣く璃夜は、対等に遊ぶ相手にはならない。

泣けば余計にいじめられるのがわかっていても、璃夜は苦痛を感じると我慢を知らず、すぐに泣いて訴える癩性かんじょうな子供でもあった。耐えるということができなかったのだ。

豊かな家庭環境、陰湿ではあっても暴力的ではなかった女子のイジメに耐えるぬるま湯のような毎日が、自分を女嫌いの軟弱者に仕上げたと自覚したのは中学に入ってからで、うつむいていた顔を上げるとき、彼の人生は一変した。

小学校では遊びの延長にすぎない校外活動も、中学からは運動系文化系ともに本格的な選択肢が広がる。

璃夜は注目を浴びなくてすむという理由から、何十人もの男子が殺到する人気のサッカー部に籍を置いたところ、本人にとっては意外にも、先輩たちにとっても可愛がられた。

入部したてのころは理由がわからなかった璃夜だが、同級生の指摘でなるほどと思った。

璃夜がサッカー部で先輩に可愛がられる理由を、同級の友人たちは、年上の少年に頼るのがうまいせいだと分析した。

璃夜には兄がいる。

四つ年上の、素晴らしく出来のいい兄だ。

同じ小学校に通っていたころ、璃夜はいつも兄の後ろに庇かばわれていた。

兄はなにかもが璃夜に優る超人だった。

頭がよく、女の子にモテて、同じ学年だろうと、上の学年だろうと、もちろん下の学年だろうと、誰からも一目置かれて尊敬され、かなう器量の男子はどこにもいない。

大人でも子供でも、だれもが「小泉月哉」という名前を聞いて、「ああ、あの」と肯定的に頷く、それが璃夜の兄だった。

中学にあがつてからしばらく、月哉はときに璃夜の送り迎えをしてくれた。

兄弟のいる同年代の連中に聞いても、そんな兄貴はいないと言われる。弟がいる奴からは、そんなに手間のかかる弟がいたら鬱陶しくてしかたないだろうと言われた。

小学生時代のように女子から粘着的なイジメに遭うのではないかとおびえ、駄々をこねて登校を嫌がった朝、月哉に手を引かれて校門をくぐり、「迎えに来てね、迎えに来てね」と何度も請うた想い出は、璃夜の胸中で頼もしい兄への敬慕をいやが上にもふくらませていた。

璃夜はとにかく最初のころ、見慣れぬ制服の群れが怖くてしかたなかった。

女子にいじめられてきた璃夜は、ニュースなどで社会問題になっているのを見るたび、いずれは男子からも暴力的なイジメを受けるのではないかとおびえ、想像を絶したストレスを感じるようになっていたのである。

学校の薦めもあつてエスカレーター式の私立中学に通うことが決まっていたから、周囲から頭一つも小さな自分がイジメに遭う確率はとても高く思え、子供のままの体型に似合わない制服の中、璃夜の心は恐怖に震えつ放しだった。

すでに高校生だった兄にいつものように泣きついて、どうして四つも年が離れているのか、はじめて両親を恨んだ。

璃夜は当時、兄がいなければ生きていけないと思っていた。

やがて毎日なだめすかさされて登校するうち、中学校がただ恐ろしいだけの場所ではないことに気づいた璃夜は、ごく普通の少年としてクラスに溶け込み、校内で一大勢力を誇るサッカー部を通じ、自然と友人の数を増やしていくようになった。

兄弟がいても、年が近ければたいい喧嘩ばかりで、いつまでもそうそう仲良しではいられない。仲が良くても、たまにする喧嘩は血を見るのが当たり前という同級生さえいた。

物心ついてから、璃夜は兄と喧嘩したことがただの一度もなかった。

それはそれで異常だと囁し立てられもしたが、璃夜は兄が怒って感情的になったところを見たことがなかったし、苦しみを弟にぶつけて憂さを晴らすような幼稚な真似はいっさいしない人物だから、恨む筋合いもない。

優秀な兄と比較されることはよくあつたが、それをしたのは両親ではなかったから、不必要な天秤を持ち出して自分を卑下する輩は、たやすく嫌うことができた。

月哉は璃夜に対し、自分の方が優等だという鼻持ちならぬ素振りを見せたことは一度もなかった。

月哉には月哉のよいところがあり、璃夜には璃夜のよいところがあるとあって、両親もまた正しく、分

け隔てなく兄弟を育ててくれた。

そうして、璃夜はゆつくりと着実に中学校生活をエンジョイできるようになった。

「安心してね」と兄に言い、「自分はもう一人でも大丈夫だから」と宣言もした。

実際、冬になると、高校一年の兄の大学受験まではもう間がなくなり、相手にされる機会も減ってしまった。璃夜は兄の進路や受験に口を挟む権利が自分にあるとは思っていなかったから、どこの大学を受けるとか、どんな道に進むとか、まるで知らなかった。

知りたいと思わないではなかったが、璃夜はもう兄の背中を必要としている小学生ではなかった。いつまでもお兄ちゃんっ子でいてはいけないという自覚くらいはあったから、兄離れしようと、意識的に離れる努力をはじめたのである。

兄には兄の人生があるのだから、まとわりついてその道を曲げてしまうわけにはいかない。

大好きな兄だからこそ、好きな道を進み、好きなように生きてほしかったのである。

——そう思っていた。

真冬のあの日、兄と同じ名前の月が、真つ黒な夜空を白々と照らした寒い夜に、世界が反転するそのときまでは……。

■ 1 ■

火曜日最後の授業を終えた1Aの生徒たちは、大騒ぎしながらチャイムと共に立ち上がった。

視聴覚教室での授業は、教室でのそれと違う浮ついた雰囲気うづわが漂うが、早く帰りたいという意味表示だけは、どこで授業を受けようと変わらないわけだ。

「レポートをまとめて、次の授業には全員提出しろよ」

パイプ椅子が奏でる金属的な音にまぎれ、世界史担当教師の菊池きくち豊ゆたかが声をあげる。教室のあちこちで申し訳程度の返事が返ったものの、生徒たちの心はとくにフランス革命フランスから遠のいている。心ここにあらずという態度に慣れた菊池は、ぞんざいな終業の挨拶を容認した。

まだベテランとは言いがたい二十七歳の菊池は、繊細な横顔がやや女性的で、柔らかな雰囲気にやわがとつきやすい庶民的なハンサムである。

若くて見場のいい彼が教壇でチョークを片付けていると、境界線をもともしない女子生徒が蝶々のようにフワフワと集まってきた。

「ユタちゃん、試験範囲もう決まってるの?」

「決まったらなんだよ」

「教えてちょーだい」